

山名赤松研究ノート

山名氏 赤松氏 研究ノート

第 2 号

序にかえて 貝原俊民

二杉家と修験 二杉國四郎

赤松余滴録 萩原初治

偶感 西山良造

久留米藩主有馬伯爵家の栄光 編集部

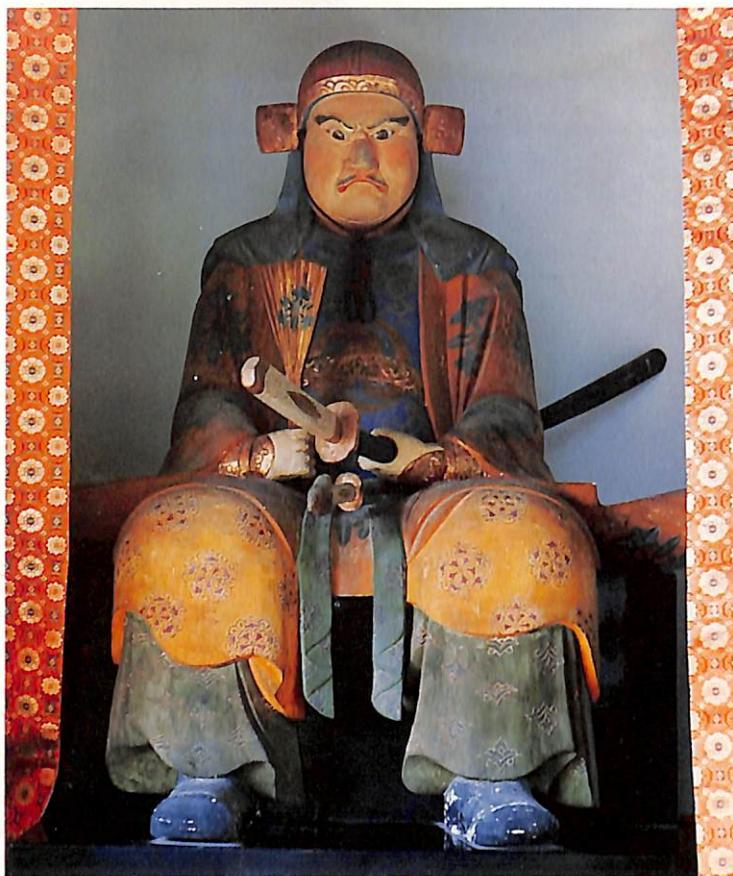
宗鑑寺殿古鑑道衡大居士に関連して 宮田靖國

太平記と赤松氏 吉川広昭

末裔登場

赤松氏関係名簿

あとがき



赤松円心公像（円心廟堂奉安）



兵庫県赤穂郡上郡町苔縄



金華山法雲寺 本堂・円心廟堂



赤松円心公墓（久昌院墓地）



臨濟宗大本山建仁寺塔頭 久昌院

赤松氏縁故の寺院



和歌山県伊都郡高野町高野山五七一

別格本山 赤 松 院

貫 主 敦 本 寿 紀

縁 起

当院は、延長元年聖快阿闍梨の創立で山本坊と云われていました。

その後、元弘年間護良親王当院に御在院当时、赤松則村隨從し、入道して円心と称され以後赤松院と改め、赤松家一族の菩提所となり、現本尊十一面觀世音菩薩と共に、自己の寿像並びに系譜等を納められる。

江戸期には、細川・有馬家の菩提寺となり、二、〇〇坪の庭園は山内第一と称せられ、現宿坊は収容客三百名の宿泊設備が整っている。

場所は奥の院入口に一番近く便利な場所である。山にはこうした宿坊が五十三ヶ寺有る。

陸士第五十六朝生菩提所

赤松氏縁故の寺院



赤松則祐開基の赤松山宝林寺（兵庫県赤穂郡上郡町河野原）



大燈国師（円心公甥）誕生の宝林寺
(兵庫県竜野市揖保町門前)



城山城陣歿將士供養塔と恩徳寺
(兵庫県竜野市揖西町中垣内甲)

序にかえて

兵庫県知事

貝原俊次

謹啓 蒸風爽やかな好季節となりましたが、ご健勝のこととお慶び申しあげます。

さて、このたびは丁重なるお手紙をいただき、誠にありがとうございました。

兵庫の地を舞台に、山名氏・赤松氏が繰りひろげられた壮大な歴史を偲ぶ慰靈祭が、四百年ぶりに取りおこなわれましたことは誠に意義深いことと存じ、心よりお喜び申しあげております。

また、慰靈祭を実現するにあたつての、山名様をはじめ皆様方の一方ならぬご努力を拝察し、敬服いたすとともに、これからも、両家の皆様のご交流が、末長く続きますことを祈念いたしております。

今後とも、どうかお身体には十分ご留意いただき、ますますご活躍されることを、お祈り申しあげます。

まずは、とり急ぎお礼まで。

敬 具

五 月 十 八 日

山名
赤松 両氏顕彰会の皆様

兵庫県知事

貝原俊氏

謹啓 残暑厳しい日が続いておりますが、ますますご健勝のこととお慶び申しあげます。

平素より、県政の推進につきまして格別のご支援ご協力を賜り、厚くお礼申しあげます。さて、このたびは丁重なお手紙とともに「研究ノート第一号」や新聞記事をご惠贈いただき誠にありがとうございました。

大変興味深く拝見させていただくとともに、この書籍をまとめにあたつての「苦労を拝察し心から敬服いたしております。

今後とも、お身体には十分ご留意されますとともにますますご活躍されることをお祈り申しあげます。

まずは、書中にてお礼まで。

敬 具

八月二十二日

山名
赤松 両氏顕彰会事務局

吉川広昭様

二 杉家と修験

二 杉 國四郎

三木史談第九号に「我が家の文書」として家蔵の古記録の目録と家系のみを報告したので、今回は修験道を中心に祖先の足どりを辿り、併せて西這田の山伏グループの実情を覚え書きした。

法界寺でお祀りしている別所公御位牌の傍らに、我が家の祖先の為之亟（為之助）の「道春禪定門」位牌も祀られている。この為之亟に三人の男子があつた。嫡男国四郎道範は、父の戦死後、祖父母に育てられ、一人の弟と共に西這田村で農を営みつつ、書を読み剣を習つた。名字帶刀を許され、農の傍ら、読み書きと剣の道を近隣の子弟に教えたという家伝がある。

三代国四郎忠範、四代国四郎治忠、五代国四郎治英、

六代国四郎英隆と代々農を以つて栄えた。修験の道に入つたのは七代家長からである。

家長は通称太兵衛といい、元禄三年（一六九〇）に生れた。当時畿内一円は大峯山の修験信仰の隆盛時代であったので、太兵衛も修験道を修め、やがて先達とも祀られている。この為之亟に三人の男子があつた。信者をひき連れて毎年、大峯山参拝登山を続けた。明和七年（一七七〇）五月廿八日、八十一歳で他界。法名日明淨輪居士。

八代太兵衛も熱烈な信仰の持主で、天台修験の教師に補任され、智光院の法号を継承、安永二年（一七七

三) 卒した。法名日誉淨貞居士。

九代弥兵衛雅英。寛保元年（一七四一）に生れ、文

化八年（一八一二）七月十七日、七十一歳で逝った。

弥兵衛も亦、父祖に劣らぬ信仰に生き、先達に補任されてゐる。法名覺無證智。

十代茂兵衛貞直に至つて修驗信仰は頂点に達した。

浪花龍山廿九組と称する大講を結び、東播信者数百名

の筆頭大先達として

活躍した。明和二年

七月十六日大峯山桜

本坊より院号職智光

院補任の允許を受け

た。（写真①参照）。

この院号は世襲され

た訳である。文化十

四年（一八一七）正

月二十五日没。法名

智覚法性。

家蔵の「龍山廿九祖先達旗」には

浪花

先達徳福院小二伊兵衛
大仙龍山

龍山廿九組

俗大先達

播州三木西道田村 智光院二杉茂兵衛

とある。神木善右衛門は九代弥兵衛の二男で庄屋神木

家に入つた。男子がなかつたので、善十郎備従が二杉

家より入つてゐる。二代続いた養子が、二杉出である。

神木家は當時醸造を業とし、現在の北山家の銘酒「島

美人」の原流であつた。北山家と神木家とは姻戚関係

にあつた故であろう。文化十年（一八一三）十月十八

日死去。法名日応理元居士。

三木市社宮の神木虎之助氏はその子孫にあたる。こ

の虎之助氏も若い頃、信仰に入り、大峯山龍泉寺から

中興開山聖宝理源大師奉贊会地方委員に依頼されてい

る。

なお茂兵衛、善兵衛（善右衛門でない）連名で、伊

兵衛なるものを脇先達に推せんし、その補任を願い出した書類の写しがある。

乍恐書付を以奉御願上候

一、西這田村二杉茂兵衛
神木善兵衛右奉御願上候。兩人共二

御大切之御徳名被為仰付、難有仕合ニ奉存候
間、同村伊兵衛と申者、兼而信心能仕者ニ而御
座候。御慈悲之上、同先ニ而モ脇先ニ而モ被為
仰付候ハバ、猶々難有奉存候。並ニ右兩人之者
ニナノリ、乍恐奉御願上候。以上

願主西這田村

二杉茂兵衛

神木善兵衛

大先達 二杉茂兵衛貞直

大先達 神木善兵衛吉兼

先達 伊兵衛信保

御老大仙公様

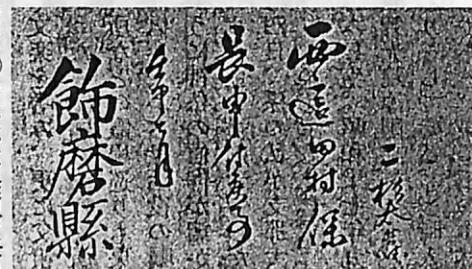
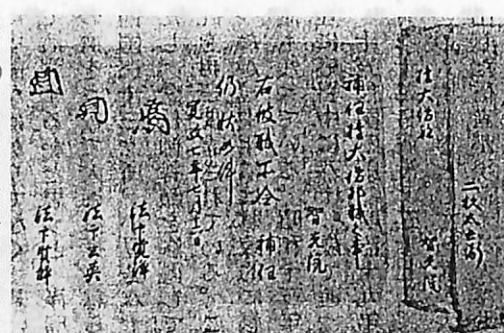
御取次 東這田村

正井勝右衛門

比勝安兵衛様

十一代太兵衛。智光院。寛政七年七月十六日、桜本坊より権大僧都職補任（写真②参照）、大先達として毎年信者を引卒して大峯山に参拝している。天保七年（一八三六）一月十一日没。法名覺山道寂。

十二代弥兵衛も大先達として信仰が篤かつた。家業



写真②十一代太兵衛が桜本坊よりの権大僧都職補任状

写真③十三代太兵衛が壬申七月（明治五年）飾磨県よりの保長任命状

の傍ら、塾を開き、手習い、算盤の指導に当った。嘉

永六年（一八五三）八月十五日卒。法名 法容篤淨。

十三代太兵衛。文政八年一月八日、弥兵衛、ゑんの

長男として生る。嘉永二年（一八四九）家督相続。こ

の人も大先達として大峯山へ参拝登山すること数を重

ねたが一方、村年寄、保長（写真③参照）、石野組戸

長役場時代の村委会員、道田組戸長役場時代にも一級

議員として再選される等、公職を歴任、在田寺檀家総

代、小和田神社、若宮厳島神社氏子総代を務めた。た

だ義侠心に富む余り、人に頼まれると、いやと云えぬ

性分から、人の借用証書にやたらと連判したため、明

治十七年三月三十日に長男嘉蔵に家督を譲つて隠居し

た。田畠四町歩、山林二町歩もあったのが、僅か田畠

一町歩程しか残せなかつた。明治二十五年七月九日、

六十八歳で永眠。法名法閻蓮台。

太兵衛には弟が多かつた。次弟虎蔵は小舟家に養子

に入り精農家として知事表彰をうけている。

三弟喜蔵は兵庫の豪商湯野家に入り「清兵衛」を名

乗つた。神戸区時代の一級議員として市議に推され、貸家八百軒も所有する程であつたが、岸本銀行の重役であつたので、銀行破産と運命を共にしてしまつた。

竹中郁（竹中音三郎）等も親戚関係にある。兵庫財界に名を馳せた「三清兵衛」とは、湯野・川西・沢田である。

末弟為蔵は村内に分家。大峯山信仰の先達としても活動した。

十四代嘉蔵。安政六年（一八五九）二月生る。明治

十七年三月家督相続。村伍長。なかなかの変り者で、

書画に堪能なばかりでなく、若い頃は地方力士今出川

関として活躍するかと思うと、淨瑠璃や文楽を嗜み、

更に父祖の血をうけて大峯参拝も怠らなかつた。四国

八十八ヶ所西国三十三ヶ所、小豆島八十八ヶ所などの

靈場巡りも果たし、念佛柳谷節を修得して播州信樂会

から世話役の嘱託を再三要請されている。このように神仏の信仰が篤かつたが、中年には財政的に恵まれず、金と女に苦労した話も残つてゐる。昭和十三年十月四

日、孫の私が支那大陸に応召中に八十一歳で逝った。法名本覚諦意居士。

十五代国四郎。明治十九年十月六日生。昭和十七年

九月二十二日病没。五十七歳。法名智光院淳國諦信居士。この人も先達として何度か大峯詣りをしている。

当時入山した信者が現存する人々も高齢である。東這田の小林光治元市議や横田集治さん、横田佐吉さん。

西這田では小舟藤七さん、小舟止雄さん、国井正雄さん、小舟浩さん、神木源二郎さん、それに私国四郎（当時隆治）と、現在先達である神木惣さんである。

さて国四郎は三十回近く参拝登山している。出発に当つて村内の棚池で身を淨め、帰るときは東南の山頂に奉祀する行者堂に詣り、待ちうけた村人に錫杖で身体をさすり神変大菩薩の御徳を頌つ行法を行い、護摩修法を執行していたのを記憶する。父は又黒住教に入信、八級信教の教位を得ている。西国巡礼に出たり、小和田神社総代を務め、消防小頭、水利委員、区長等も歴任した。また大峯山本部内道場龍泉寺より理源大

師奉賛会地方委員の依嘱を受けた。本業の金物卸問屋（鋸専門）も順調な伸びを見せ、神戸の日本東亞必需品輸出組合に加盟して大いに志を国外に向けた。

十六代国四郎が私で、修験の道は至つて浅い。しかし西這田では今も大峯山山上講を組織し、二杉照雄・神木惣両氏を先達として三十名程の講員が例年登山参拝を続け、信仰の伝統を絶やしていない。

私は、山伏としての先祖の峯入りの姿を思い浮べる。龍山廿九組の講旗を先頭に翻し、法螺貝を高々と吹き鳴らす山伏姿の一行。念珠を繰り、南無神変大菩薩、南無不動明王、南無聖宝理源大師と、仏名を唱えながら、力強く錫杖を突き立ててゆく。腰の太刀は降魔の利剣、腰の鈴の音も爽やかに響く。海拔三千余尺。山道を進む一行の淨衣は木立の色に愈々白い。同行の山伏と再三山伏問答をかけ合う道中も真剣である。特に先達は責任が重い。細心の注意を払い、登山修業の実を挙げ、無事下山を見届けねばならない。自分の登山修験を通して、父祖の勞に思い当るのである。

註、二杉家は、別所氏の臣で三木合戦の侍大将であった。

赤松余滴録

萩原初治

有感 山名
赤松顕彰会

である。供養開眼式に深い感銘を受け帰り、改めて町当局に供養塔再建を願望し、平成二年七月十五日、日

蒸風漾々綠但州天 供養塔前皆敬虔
戰國遺名剛勇士 一詩賦奠想綿綿

蒸風綠を漾はす但州の天
供養塔前皆敬虔

戰國名をのこす剛勇の士
一詩賦奠すれば想は綿綿たり

「赤松則尚公に関してですが五輪（地名）の石塔が現在行方不明となっていますものの「千軒湾東泊附近にあると推測されています」町教育委員会でも、文化財

保護委員会の皆さん方共々調査研究を進めながら対応してまいりることであり、ご理解をお願い致します
云々）町長返書の中に現在行方不明となっていますが云々とあるが、仄聞するに昭和三十五年頃供養塔が所
在していた附近を発掘調査したが、其の後如何なる伝
山名兩家鎮魂顕彰を企画推進、之を五月二十六日に赤松敬仏敬祖の賜と、ここに深甚なる敬意を擧げるもの

手を求めたのが詳細は知り難いが、大阪方面の数奇者か？新興成金か？ 船積して家の庭に設置したが、以來同家は不幸が続き、其の為之を返却のため現地に来たが、如何なる理由か「千軒湾東泊附近海中に投棄したとの通説になつてゐる」なお供養塔や史説に関する調査研究には、平成二年九月二十五日教育委員会並びに文化財保護委員会では、上郡町教育委員会で説明を聞き、更に赤松氏由緒の地、法雲寺（首実検のありし寺）宝林寺、松雲寺に実地踏査見聞に赴いた、十月末日特別史跡閑谷広糸菜（孔子祭）には、日生町南教育長等と招待され同行した際、供養塔再建について教育委員会の方針を聞き、更に年末町長に面会之を再確認、意を強くした次第であり、平成三年一月十三日山下日生文化財保護委員長に面接した際、供養塔の存在していいた附近（現在建設予定地）は国有地になつてゐる（岡山営林署所管）日生町営林署出張所長の言に依れば、反対するのではないが申請者、並びに今後の維持管理の明確化を定めて欲しいとのことであり、近く

町長と岡山営林署長の会談が予定されているとのことである、且平成二年度十一月を目安に準備を進めていることであり、近く建立するなれば確たる掲示をせねばならず、論拠を求めるに更に上郡町某旧家に秘蔵してある（文書と系図）文献を調査に、教育委員、文化財保護委員が赴くことである、供養塔再建予定地より更に東方の海浜には、古代体験村を設け、着々準備を進め、青少年、或は訪れる人で、体験希望者には、文字通り原始体験をする茅葺の十棟程の古代集落を建て（殆んど完成とか）又附近に備前藩主池田光政公の鹿狩に来ていた故地（御前岩と称する岩あり）あり、将来供養塔附近より、体験村経由御前岩附近まで遊歩道を設ける予定とか、横道に話をそらし、或は拙文を弄し慚愧の至ります、要は小生の言はんと欲する所を諒せられていただけば幸甚です。

合掌

偶 感

西山良造

新年おめでとうございます。

昨年の暮には貴重な研究ノート送つていただきまして本当に有難うございました。厚く御礼申し上げます。

山名氏の研究熱心な方々につくづく頭が下ります。

こちら赤松氏の方は、上郡の藤本哲氏がよく研究され、本も発行されておりまので、両方併せれば、どんなに歴史が新発見されるでしょうか楽しみに思います。

す。

私は赤松の直系ではありませんが、妻が旧姓赤松を名乗つており、妻の実家の事について少々書きたいと思ひペンを持ちました。

昔々、赤松氏が残党を率いて落ちのびた所が、美作の国みなぎと云う所でした。そこで農家に頼み大根と味噌を買い求め、皆で祝杯を上げたそうです。そして百姓として名前を赤松久作と改め、代々長男は久作と

名乗る事になつております。

昨年、何十年振りかに故郷をみたいと八十五才の母の願いを入れて訪れました所、「御本家様が帰つて来んさつた」と母の友達や村人が出迎えて下さつたのにはびっくりしました。

故郷を思う時、もう絶えてしまつた赤松本家を思う時、母の胸中はいかばかりかと涙を禁じ得ません。

母は女子故にこれ以上の話は聞いておらず残念至極でございます。昔には、糸団や鎗や、小判がめに刀二振りと残つていたそうですが、人に乞われて放してしまいました。小判がめはお寺様に渡り、やりの（三間やり）の柄だけが一本、妻の妹宅に残されています。

墓地も、最後の男子が戦地へゆき戦死、あとは女子ばかり都會へ出ていき、きちんとした守り人がありません。かろうじて妻の母が村人にたのみ細々と草刈りをしているに過ぎず、私が守つていこうと決心した所へ、山名・赤松氏の研究ノートが届きまして、これもきっと御先祖様のお引き合せかと思つています。

上郡の法雲寺様へ、祖母・祖父が二日がかりで、昔はひそかにお参りを続けていたそうでございます。その法雲寺も再建され、本当に嬉しいことでござります。ひそかにひそかにと、移り住んだ美作の赤松氏、百姓として生き続けた赤松氏、赤松の誰が先祖なのか、何一つ分かりませんが今後共よろしくお願ひ申し上げます。

老母（八十五才赤松こいと）の話も、現在、余命いくばくもなく入院中で、返事が、お札が、おくれましたこと重々におわび申し上げます。

研究ノートに書いていたく様な原稿ではあります
が、思いのままに雑感を書き並べました。

久留米藩主有馬伯爵家の栄光

編集部

仁和寺宮嘉彰（のち小松宮彰仁）親王は、世紀の鳥羽伏見の決戦に際し弱冠十八歳で征討大将軍となり幕末史に名を残すが、この宮の夫人となつたのが有馬家の

幕末の当主頼成の息女頼子である。また、仁和寺宮の弟宮輪王寺宮（のち北白川宮能久親王）の王女貞子が頼成の孫頼寧に嫁した。

頼寧の父頼萬は明治・大正の当主だが、旧弊なしきたりを重んじた人だった。

「華族物語」（昭和七年刊、山口愛川著）によると、時代はなれのしたお大名氣質の人だったという。橋場（浅草）の本邸の奥ふかくに大勢の召使いにかしづかれてめったに外出しなかつた。

外出するときはそれこそ大掛りなもので三太夫や腰元が前後左右をとり囲み、

当時、

「有馬の殿様のお出ましよ」と界隈の名物になつていたといふ。嗣子の頼寧はその正反対で、華閥界の革命児といつていい。

「華族物語」は、

「……日比谷公園の草拂りで同族をアツと驚かせ、農村問題の研究では、真新しい意見を吐く。次には水平社運動の先駆者になつて同愛会を起したが……」とその異色ぶりをのべている。

頼寧は、華族の身ながら摺籃期の社会主義運動に身を投じた。ベストセラー「死線を越えて」で一世を風靡した社会運動家賀川豊彦や「貧乏物語」の河上馨らの影響をうけた。労働学校をつくつたり差別解放の水平社運動に献身し、当時の金で四十万円（現在の十億ぐらい）もつかつた。高利貸しの門もくぐつたといわれている。

北白川宮の王女貞子と結婚したのは、頼寧二十歳のときで、花嫁は十七歳であつた。まだ学習院の生徒で、当時下級生の近衛文麿（のち首相）が「有馬さん御結婚」と叫んでひやかしたという。のちに作家となつた長男頼義は、母の貞子の生涯を記録にのこしている。大正十二年九月一日、東京に大震災が突発し下町は全滅に瀕したが、このとき頼寧は率先して罹災者の炊き出しや、米・麦・馬鈴薯をはこんで無料配布した。翌年かれは衆議院議員選挙に出馬。華族としては破天荒なことだった。伯爵を相続すれば貴族院議員に選出されるのである。

貴族院をバックにした清浦奎吾内閣反対を旗印にした。選挙区を久留米藩二十一万石のお膝元にちかい福岡十二区三井・浮羽両郡であり、当時の大政党政友会から立候補した元名古屋市長を破つて当選した。

しかし代議士生活二年にして、資格を喪失する。父頼萬の死により伯爵をついだのである。貴族院へうつらねばならなかつた。

有馬家の発祥の地は摂津（兵庫県）有馬郡有馬庄である。

いまの神戸市北区有馬町。神戸電鉄で湊川駅から四十分の有馬温泉駅である。西暦六三一年ごろからすでに温泉の名が高く、道後や草津とならぶ名湯である。

豊臣秀吉や黒田官兵衛もこの湯につかっている。
先祖は、足利尊氏について活躍した赤松則村のわかれという。則村の孫義祐が有馬郡に城をもち、有馬姓を名のつたのがはじまりである。

久留米藩初代は豊氏だが、世にあらわれるのは豊氏の父則頼の代である。則頼は播磨（兵庫県）の三木満

田城主重則の子にうまれ、のち秀吉の御伽衆（主人の

がふかい。

話相手）にとり立てられる。天正十九年（一五九一）

には摂津・播磨で一万石余の所領をもらい、織田信長

の突然の死による天下の争奪戦にも一役果した。清洲

城の重臣会議で柴田勝家はライバル秀吉の殺害を企図

したが、その空気をいち早く察した則頼は、剣をかまえて秀吉をまもつたという。

子の豊氏は、関ヶ原役では徳川に味方し、最初福知

山六万石の城主となつた。ついで父則頼の遺領二万石

をつぎ八万石

となつたが、

更に元和六年

（一六二〇）、

筑後久留米二

十一万石に加

増された。

有馬藩は、

第一次近衛文麿内閣が組閣された。

近代科学と縁



有馬豊氏

八代目の頼檍は大名としては珍しく数学家として令名をはせている。関孝和の衣鉢をつぎ、点竈学（代数）、こせき 弧こく 脊せき 術（円の研究）にすぐれ、『拾機算法』（全五巻）

という代数学では本邦初の出版をしている。

幕末にも久留米藩からは発明家が出た。田中久重は、わが国で初めて汽船のヒナ型を琵琶湖で運転し、鷹司卿より「日本第一の細工師」と絶讃された。戊辰戦争で威力を發揮したアームストロング砲や最初の汽船凌風丸もつくった。

またこの地の特産久留米ガスリは井上伝子がはじめたものだが、士族の授産事業として藩が奨励したものだつた。西南戦争の従軍兵が、帰国土産に久留米ガスリを買ってかえつたのが全国にひろまるきっかけだつたという。

昭和十二年六月――。

この年日中戦争がはじまり、日本は第二次世界大戦

の破局に向かつて決定的な歩みを進める。

賴寧は近衛の友人でありプレーンでもあった。近衛

内閣には農林大臣として入閣し、また大政翼賛会がで

きると初代の事務総長に就任した。もつともこのときは、右翼の反対にあって五ヶ月で辞任する。

太平洋戦争が敗戦でおわると、占領軍による戦争責任の追及がおこなわれ、賴寧は戦時中の経歴をとられ、

A級戦犯として、巣鴨拘置所に留置される。絞首刑になるかもしれない不安な日々をすごしたが、さいわい釈放された。

かれの『七十年の回想』によると出所するとき懐中無一文、小さな風呂敷包み一つもつたきりで、電車賃を交番で借りてやつと西荻窪の自宅まで帰りついたという。追放を解除されて中央競馬会理事長などの職についたが、昭和三十一年に亡くなつた。

賴寧と貞子夫人の間にうまれたのが、作家有馬頼義である。『終身未決囚』で昭和二十九年上半年期の直木賞にえらばれ、「四万人の目撃者」で日本探偵作家ク

ラブ賞（現推理作家協会賞）をうけ、松本清張氏とともに社会派推理小説のブームをつくつた。現当主は賴義の長男賴央氏。

本稿は、秋田書店刊「歴史と旅」60／1臨時増刊号の記事を拝借させていただきました。明記して深謝いたします。

編集部

宗鑑寺殿古鑑道衡大居士に関連して

宮田靖國

昨年、一九九〇年五月二十六日、兵庫県の竹田城頭で、赤松氏・山名氏両軍陣歿諸靈供養塔落成開眼式典が盛大に挙行され、小生が僭越ながら司会をさせて頂きました事は無上の法幸でした。五月二十六日は応仁の大乱の火蓋が切って落された日であり、又、去年は奇しくも、明徳の乱陣歿者の六百年遠忌に当ると共に嘉吉の乱に散華された方々の五百五十年遠諱にも当つていました。誠に不思議な巡り合わせであり、すべては諸靈の御手に導かれての事としか思えません。

山名氏一族全滅と言いましても、それは十一ヶ国之内、九ヶ国、即ち山城、和泉、紀伊、丹波、丹後、美作、出雲、隠岐を失った事を意味し、但馬、伯耆、因幡の三ヶ国は義満將軍側に付いた時潔、氏之、そして宥免された氏家によつて保つ事ができました。これは

嘉吉の乱の事につきましては、あまり詳しい事を存じませんが、昨年暮に当方一族会お歴々の御法徳のおかげをもちまして、宗鑑寺殿、即ち、山名氏清公の六百年遠忌法要を村岡の法雲寺に於て、吉川広昭師によ

り修して頂きました。それで、山名氏一族が全滅したと言われる明徳の乱と、宗鑑寺殿に関連することを少々述べてみたいと思います。

嘉吉の乱で赤松氏一族が全滅したと言つても、それは満祐公の一門であり、將軍側には赤松伊豆守貞村公があつて、播磨国を攻めておられるのと同じようなものです。源氏とは、古より一族を分ちて戦場に臨むこと少なしとしないのです。足利氏然り、細川氏も亦然り

です。

しかしながら、一族相食むは武門の習いとは言え、悲惨の極みです。氏清と甥の時潔との戦いは悲痛であつたと思います。それは時潔の正室が氏清の娘であつたから余計倍加したと推測します。時潔公の正室が氏清の娘であったことは、小坂博之先生が、その著「山名常潔と禅刹」の中で「前南禅瑞岩禅師行道記」の「而母託之安栖無染、無染氏清公之女、而其宗巨川公夫人也」とあるから理解できる、と書かれている。巨川公とは大明寺殿巨川道潔大禪定門、即ち時潔公の事です。たゞ明徳の乱當時、すでに時潔の妻であつたかどうかが疑問ですが、私はすでに妻であつたと思います。確かに嫡男満時が生まれたのは応永三年です。明徳の乱から五年も経てゐる。だから明徳の乱後に結婚したのではないか、と考える人もいる。しかし、それは無理です。と、言うのは、但馬山名氏直系第二十九世山名武男様御秘蔵の系図には、氏清の娘で山名宮内少輔時潔室と書いてある女子と、播州室と書いてある

女子との間には六人の名前が挙げられている。播州室は既に満幸の正室ですから、明徳の乱当时、播州室は既に満幸の正室であつた。時潔室はその姉として書かれているのであるから、当時既に結婚していたと考えるのが妥当である。第一、その時、時潔公は二十五才である。早婚の時代に未だ独身だったとは考えられない。さて、そうなると、氏清の娘、安栖無染、即ち、系図に言う安清開基大明寺御上にとつて、明徳の乱とは地獄の苦しみであつたろう。なぜなら父と夫が戦つてゐるのだから。父と夫が戦つてゐると言えば、宗全の娘、即ち、細川勝元夫人も同じであつた事を想起する。

さて、南禅寺栖真院に於て、応永三十年十二月三十日、氏清の三十三回忌法要を南禅寺住持惟肖得巖によつて修した施主、つまり、「東海璣華集」に言う京居奉菩薩戒孝女某とは、時潔公の妻、即ち氏清の娘、安栖無染であろう。

ちなみに、氏清の戒名であるが、よく宗鏡寺殿では

ないかと言われる。しかし、惟肖得巖禪師も、「宗鑑寺殿古鑑衡公大禪定門三十三回忌陞座云々」で始めている。又、山名家犬追物記である「篠葉集」には是豊が、「当家犬追物故実の一卷は、孫二郎殿の記是なり。然るに是は道靜公の御時、宗鑑寺殿へ御讓候。愚祖にて候円通寺殿所望候へども、御ゆるしなく、あまつさえ公方より召候て、一卷は公庭にあり。其うつしは宗鑑寺殿所持申さるゝところに、去る明徳の比ほひ、宗鑑寺逆意。故殿公方の御味方申たる故、一家のよしみ互にむなしく、鉢先をとき申候訖、云々」と書いていふ。又それに政豊が、

「右篠葉一卷。叔父是豊之手跡也。依御所望進之者也。」

と書き添えている。これから見ても、当時の人々は氏清を宗鏡寺殿ではなく、宗鑑寺殿と言っていた事がわかる。たゞ宗鏡寺は氏清開基ではなく、時熙公が建立されたのである。

さて、時熙の妻と同様、氏清の妻にとつても明徳の

乱は苦痛であつたに違いない。それは娘が時熙の妻といふ理由だけでなく、氏清の妻、即ち左中将保脩女とは、実は持明院家の正嫡の姫だったからである。持明院家とは、北朝を持明院と称することからもわかるよう、代々北朝の院の御所となつていた。氏清は南朝から春日刑部少輔顯連によつて錦の御旗を授けられていたのであるから、矛盾することはなはだしかつたであろう。だからこそ、氏清の後を追つて自害し、湯水を断つて正月の十三日に亡くなつてしまつた。今、この拙稿を書いているのは正に六百年遠諱に當る命日、一九九一年一月十三日である。その追善供養に書けば、持明院家は羽林家の一つで、御堂閥白道長の次男、従一位右大臣頼宗の系譜である。頼宗の孫基頼が邸内に持仏堂を建立し持明院と名づけた。その子通基は以て家号とし、その子基家の娘陳子は後高倉院の妃となり、後堀河院の国母となつた。その為、持明院家は里内裏ともなり、又、院政の御所ともなつた。この故に北朝は持明院統と称されるのである。「尊卑分脈」は保脩

を持明院正嫡とし、左中将正四位下能書家早世と後付

を析るや切である。

けしている。これは代々、正二位大納言の家柄であったのに早世した為その位に就けなかつた、と言う意味であろう。その女子に山名陸奥守源氏清室と註している。ただ、保脩^経には兄と弟がいた。兄は出家して又還俗した保世であるが、正嫡ではない。しかし、その娘には驚くべき事に、細川武藏守源頼之朝臣室と尻付けしている。頼之は明徳の乱で義満將軍を助けた、否、山名渢しを強行した人物である。妻は従姉妹という事になる。氏清が畿内近くの領国、即ち山城国、和泉国、丹波国、但馬国、摂津国半国が与えられた理由がここにある、と私は考へている。つまり、南朝色の濃い山名一族の中で、たゞ一人、北朝色が強く、細川氏に連なるのは実に氏清だったのである。もつと驚くべき事には系図に、時櫻室の姉として細川讚岐守室とある女子がいた。つまり、氏清の妻にとつて、弟の持明院保定も、従姉も、娘一人も敵側にあつたのである。心中を察して余りある。六百年の昔の事ではあるが、冥福

副紋が三つ引両である。三つ引両は氏清の紋であつたから当然であるが、鷹の羽は母方の縁に由来すると言ふ伝えている。たしかに持明院家は羽林（近衛府の唐名）家の一つではあるが、羽林家がすべて鷹の羽を家紋としたとも思えない。おそらく、宮田家の始祖が左近衛の大夫将監、従五位下であつたので、近衛府の鷹の旗からとつたのであろう。近衛は中世、元日の節会や即位式に鷹の旗を左右の両陣にかかげたそ�である。あるいは武官の武礼冠に鷹の羽をさしたからかもしれないと私は考へている。

さて、氏清の一一周忌については、竹内秀雄氏が「北野經王堂に就て」という論文の中で「内野の戦の一周年である明徳三年十二月には義満は初めて萬部經会を内野に修する事を発願し、自ら法華經七部を頓写し、五山の僧一千人を以て大施餓鬼を行ひ「陸奥前司氏清幽儀并に諸卒戰死の亡靈六道の有情三界の萬靈悉皆得

道」と廻向した。と書いている。たゞし、「明徳記」は内野ではなく相国寺に於て、と書いている。その場所は応永二年から北野南馬場に移り、応永七年には十月七日から十日間、北野右近馬場に仮屋を建て、法師千人が朝經四卷、夕經四卷の二座を勧行し、義満は毎日その聴聞所に入つた。ついで、翌八年には氏清追福のために初めて經王堂を建立した。この時の導師は善應寺正範禪師であつた。この僧侶は「明徳記」にも出ている。「奥州、上総介、小次郎の死骸共、戦場の路辺に散乱れて取供養する人もなかりしかば、年来近付申されし善應寺正範禪師晦日晚景に御所へ参じて『此人々の有様共あまりに痛敷存候へば、御免を蒙て取納奉るべき』由申されければ『尤斗蔽の御しし然べし』と御ゆるされ有しかば、如形取納て一片の煙となされけり。——中略——總て遺骨を取て嵯峨のあたりに忍てましましける御母儀の方へ進^{おさ}られしかば、云々」であるから、氏清の遺骨は母へ納められた事になる。問題は氏清の首級がどうなつたかである。「南方紀

伝」には「右此時首級數百余疋雖有之、其中首八以実檢、大將首員外也、何首札附、名字書、氏清首母衣纏杉木掛、云々」とある。

ところで、吉田東伍博士著「大日本地名辞書」の北野神社の項に、「神州奇苑云、北野天満宮南の石鳥居の傍に、大なる五輪石塔あり、世に之を忌明塔と云ふ。——中略——按に此石塔は山名氏清の墓ならずや。礎礎集曰、竹内法親王の仰に、北野の經王堂の艮の礎は山名氏清の墳墓なり、乱世にまぎれていつしか唱失ひたり、内野合戦の後此に經王堂建てたまへば其墓も之に近かるべし云々」とある。

だが、室町時代の古絵図（大報恩寺藏）には一の鳥居東南に「經王堂」として見えている。天和年間、經王堂を小堂に改築した時に、場所は以前より稍々西方に移つたものと考えられる。明治三年經王堂は廢仏毀釈によつて廃寺となり、山名知高公が建立された山名氏清碑は經王堂を支配していた大報恩寺に移されたのである。だから江戸時代にも盛大に當まれていたのであ

る。「山州名跡志」によれば、元禄頃には中央に四尺ばかりの、千手觀音立像があつた、とある。

勿論、室町時代は毎年十月五日より十四日まで、毎日、一千人の僧が一部づつ同音で都合千部、十日間で一万部を誦誦し、將軍は代々、義満の志を継ぎ、義持、義教、義政と参詣して聴聞した。「年中恒例記」は、經王堂には棧敷が南北にあり、北は御台様、南は公方様と記している。

一、十月五日

一、北野御經へ渡御、先松梅院へ御成ありて御裝束を被改、經堂へ渡御云々

とある。

吉田家日次記によれば、応永十年の食料は、僧侶が千人の定員で補欠の僧が百人、合計千百口に対して、一日に六千六百疋、十日間には六萬六千疋を要したのである。更に御布施においては、一人に鵝眼百疋、練貫小袖一重等云々とある。又、「満済准后日記」によれば、永享元年には御布施は一人につき、三百疋であつたから。あるいは康永二年（一二四三年）以降、

あつた。たゞ、「親長記」は、文明十七年十月には僅かに三百四十五人の僧衆に過ぎない。これは偏に「依無御布施、近年如此」と書いている。下つて、天文十四年十月四日には、三好政長が萬部經会を営んだ。十月八日に参詣した山科言繼は「以外群集、市屋共不知數有之、種々勧進難盡筆舌」と、その日記に描写している。

私が言いたいのは、氏清公の墳墓は確実に北野天満宮の鳥居の近くにあつた、と言うことである。たしかに山名知高公の氏清碑文から考えて、鳥居の東から西に移つたかもしだれない。しかし、どちらにしても、今この鳥居の内側、即ち天満宮本殿側にあつた。と考える。なぜ、その事にこだわるかと言えば、南方紀伝の言う宮田城の近く、宮田天満宮境内に、二百十八センチの宝篋印塔がある。これは氏清の供養塔である。鎌倉時代の作と言う人もある。それなら氏清の祖父政氏の供養塔かもしれない。なんとなれば、鎌倉幕府の引付衆であつたから。あるいは康永二年（一二四三年）以降、

時氏は丹波守護であつて、旧山陰道を見おろす宮田城を氏清に築かせたのだから、時氏の供養塔かもしけない。しかし、それにしても天満宮境内と言うのは解せない。やはり、応永十六年九月五日に山名左近大夫将監入道調心が四代將軍義時から宮田庄を宛行われた事は動かし難い事実であるから、彼か、あるいはその子孫によつて建立された氏清の供養塔であろう。

又、東木之部の薬師堂にある一基の五輪塔と二基の宝篋印塔は、応永の乱や応仁の乱で討死した人々の墓と供養塔である。薬師如来は清和天皇の念持仏でもあつたが、日本三大妙見の一つであり、宗全公の祈願所でもあつた但馬妙見の御本尊が薬師如来であつた。

最後に、宮田庄を本貫とした宮田氏は、応仁の乱で政豊公に従つていたのか、東軍の是豊公についていたのか、と尋ねられるので、二つほど証拠をあげて陣歿諸靈の供養としたい。大外記であつた中原康富の日記の享徳二（一四五四）年十二月三日の条に、

「山名彈正少弼弟七郎、并少弼子息次郎、宮田等出

仕也。去月一日山名金吾人道云々」と、あつて宗全の代りに教豊か政豊が出仕した事がわかる。それに宮田が従つているが、これは宮田民部少輔教実である。

又、「東寺執行日記」の文明六年四月三日の条には「同夜細川聰明殿（聰達）と山名少弼殿和睦治定之由風聞、

此夜先山名宮田殿御内垣屋以下五人馬引かせて細川殿へ札被申、驥又細川殿師子草殿御内安富以下五人馬引て、山名殿へ札被出申、其後又聰明殿御母子山名殿へ御出、御酒有之由承及也」と、ある。

和睦のお膳立てをしたのは、おそらく宮田備後守であろう。それは、いつまでも敵対関係にあつては、宮田庄の保全に支障をきたすからである。この記事によれば、聰明殿母子、即ち政元とその母（宗全の娘）が山名邸へ入つた事が分る。勝元の未亡人にすれば里帰りであつたが、細川政元を連れて帰つた処が重大なのである。聰明丸は当時九才であつたから、山名政豊が後見人となり、山城国守護ともなつた。後年、政元の後継者である管領細川高国公の軍に加わり、三好勢と

戦つて、享禄四（一五三二）年辛卯六月、高国公の敗死と共に摂津国で討死した宮田五郎豊武と言う者がいた。

この高国公の姫君が山名豊国公の御生母であることを想起する時、丹波の宮田氏は山名家と細川家の間に立つて腐心奔走し、和睦に尽瘁する姿が眼前に彷彿とするのである。

毎年初夏に沙羅双樹の花を賞てる為、妙心寺塔頭東林院へ伺うが、そこが両公の菩提寺である事は、そこはかとなく宿縁を感じる。

梅津長福寺と宗全公荼毘塔

京都市右京区梅津中村町
丈梅山 長福寺境内

文明五年三月十九日

山名宗全公は公の再興された長福寺で七十才の生を閉じられた。遺骸は同寺境内で火葬に付される。

中央が宗全公の塔



今、火葬跡に建つさきやかなこの五輪塔には訪う人も絶えてないというが、青苔緑陰のこのところこそ、一代の英雄にはかえつてふさわしい安禅の床ではあるまい。

なお、公の御廟所は洛東南禪寺塔頭の真乘院に巨石をもつて築かれているが、いざれもが山名氏末裔にとつては聖域のはずである。一度参詣されるようお奨めします。

（事務局 吉川 広昭記）

「太平記」と赤松氏

事務局 吉川広昭

ことしの正月からNHKで大河ドラマ「太平記」

窺つてみた。

が始まったが、ここでわが赤松氏はどのように扱われているかを探つてみた。といつても脚本の原

赤松氏は村上天皇の皇子具平親王を祖とする播州の豪族である。

本を見たわけではないので何とも言えないが、日本放送出版協会刊の「太平記」では何と赤松氏のアの字も出てこないではないか。そこで、原作の吉川英治「私本太平記」に当つてみた。しかし、「ここでもほんの僅かしか書かれていらない。尤も、これはもともと小説なんだから、史実と違うなどと言える筋ではないのだが、我々末孫のものとし

謹シデ赤松氏ノ家牒ヲ按ズルニ、昔村上天皇王子有リ。具平親王ト曰フ。時ニ六條宮ト号シ、後ニ中務卿ト称ス。才芸世ニ絶ス……親王ノ嗣久我大臣タリ。大臣ノ華胄分レテ武家ト為ル。播磨守家範ナル者有リ。始メテ赤松ト号ス。家範四代ノ孫ヲ則村ト曰フ。法名円心。月潭ト号ス（景徐周麟

「翰林葫蘆集」）

てはいささか心淋しくもの足りぬ思いがする。そこで、私なりに「太平記」時代の赤松氏の動向を

赤松氏といえば「円心」が代表者として浮びあがるが、円心は弘安二年に茂則の息として生れた。この年

弘安の役がおこる。幼名次郎法師丸。長じて則村とい

う。青年から壯年にかけて大番役勤仕のため度々上洛した。正和五年（一二二〇六）三十八才で一族の本拠である白旗城を継承した。四十八才頃入道し、以後円心と号している。

円心の三男則祐は比叡山に上り、天台座主尊雲法親

王（大塔宮護良親王）に随侍していた。彼を權律師則祐と称する所以である。（權律師とは僧正・僧都・律師という僧官の初位である）

文保二年（一二三一八）後醍醐天皇即位。

正中元年（一二三二四）正中の変。第一次討幕計画

発覚。

元弘元年（一二三三一）元弘の乱。第二次討幕計画

失敗。

後醍醐天皇は笠置寺に逃れられたが、囚われの身となり、翌年隱岐島配流となつた。大塔宮も南都へ潜入して令旨を各方面に発し、討幕挙兵を図る。宮側近くの權律師則祐は父円心を説いて蹶起を促した。

元弘三年一月二十一日　円心挙兵。

円心は大塔宮の令旨を奉じて兵を挙げ、直ちに近隣の幕府方を攻撃した。

一月二十七日　高田兵庫輔を高田西条山城に破り、次いで備前三石城に伊東維群を破る。

二月十五日　円心、摂津赤松城に六波羅軍と戦

う。

二月二十一日　大塔宮、播磨太山寺・摂津箕面寺の衆徒に赤松城に結集を命じる。

二月二十五日　円心、摩耶山城に六波羅軍と再び戦う。

三月十二日　円心、摂津瀬川で幕府軍に大勝し、

一気に京都に進撃するも敗退。

と、このように建武中興の先陣を切つて円心は歴史の舞台に颶爽と登場するのである。円心時に五十五才。まさに名の通り円熟の境に達した驍将ぶりであつたう。

因みに、足利高氏の拳兵はこれより遅れて四月であるし、新田義貞は五月に蹶つてゐる。

このごろ、後醍醐天皇は隱岐を脱出、名和長年の先導で大山寺末寺の船上山（寺）に行宮を設けられる。

四月二十七日

八幡の戦いで円心の将佐用範家、

幕軍の総大将名越家を討取り幕軍総ぐずれとなる。

五月七日

円心、足利高氏と共に六波羅を攻略する。

五月二十七日

円心、天皇を兵庫に迎え軍功を賞せられる。

六月一日

円心、天皇還御の先駆を勤める。

六月二十三日

円心、信貴山城より大塔宮を迎える。先駆して入京。

八月

円心、軍功により播磨国守護職に任せられる。

円心にとつては生涯最高の日々であつた。「天下草創ノ功ハ偏ニ汝等品質ノ忠戦ニヨレリ。恩賞ハ各望ニ

任スベシ」との優渥な勅旨によるものである。然し、その感激は暫くのことであつた。翌建武元年（一二三三）四）円心は播磨守護職を解かれ、僅かに本貫の地である佐用庄の地頭職だけを安堵されるのである。この懲罰ともいえる処遇の理由は何であつたのか。

思うに円心の忠勤は大塔宮を通じてのものであつたが、その大塔宮が建武政権に容れられず、一度任命された征夷大將軍の職も剝奪され、更には鎌倉の足利直義の許で幽閉されるという悲劇との関連によるものであろうか。ともあれ、建武の創業に諸将に先んじて参加し、自他共に認める戦功をたてた円心にとつては、まさに青天の霹靂であつた。忿懣と屈辱を内に、一族とともに赤松へ引揚げた円心の心事は察するに余りがある。ただ一つの救いは、天皇の側近第一といわれる万里小路藤房の円心弁護であろう。

元弘大乱ノ始、天下ノ士卒拳テ官軍ニ属セシ事更ニ無他。只一戦ノ利ヲ以テ勳功ノ賞ニ預ラント思ヘル故ナリ。（中略）

今度天下ヲ定メテ君ノ宸襟ヲ休メ奉ル者ハ高氏。義貞・正成・円心・長年ナリ。其志節ニ当リ義ニ向テ忠ヲ立所、何レヲカ前トシ何レヲカ後トセン。

建武三年一月 天皇比叡山に避難。尊氏入京。北畠顕家軍追尾。

同年二月 円心敗走の尊氏を援ける（室泊其賞皆均其爵是同カルベキ処ニ、円心一人僅ニ一本一所ノ安堵ヲ全ジテ守護恩補ノ國ヲ被召返事、其咎ソモ何事ゾヤ……）

との諫言に天皇は「竜顔少シ逆鱗ノ氣色有テ」黙殺されたとある。

建武二年七月 北条高時の遺子時行、信濃に挙兵し、鎌倉を攻略。

直義西走する（中先代の乱）

尊氏はこれの鎮圧に東下するに当つて、円心に協力を乞うた。円心は二男貞範を派して盟に応えた。

同年十二月

箱根竹の下の戦い。

貞範は勇戦して義貞の軍を破つてゐる。尊氏はこの

時に天皇と建武政権に訣別を告げ、武家政権樹立のために軍を京に進めた。先陣は嘉例により赤松氏が承つた。

同年五月 円心、敗走の尊氏を援ける（室泊の軍議）

この時円心は、名分にこだわる尊氏に、光嚴上皇（持明院統）の院宣を受けるよう勧めた。院宣——錦の御旗である。これがあれば逆賊の汚名は立所に灌がれ、士氣も振いたつ。円心の助言と斡旋が奏功して、尊氏は備後鞆津に着いた時、急拠下向した院使の醍醐寺三宝院賢俊より義貞追討の院宣を受ける。

建武三年四月 新田義貞、播磨白幡城に円心を囲

むも陥落不能。

同年五月

尊氏軍、九州勢を率いて東上、義

貞軍囮みを解いて兵庫に退き布陣

（湊川の戦い）

光嚴院の錦旗をいただいた尊氏・直義軍は水陸両面に分れて破竹の勢いで東上する。白旗城で孤軍よく五十余日の間新田勢をくい止めた赤松軍は、ここでも先

鋒となつて陸の直義軍に加担する。

建武三年六月 尊氏入京。

同年八月 光明天皇践祚。

同年十一月

尊氏幕府を開く。

このころ円心、播磨守護職に任せ

られる。

建武四年

円心、光明天皇より軍功の賞として直垂を拝領。

同年八月

円心の長子範資、摂津守護職を受ける。

この後も摂津播磨の各所で南軍との交戦が続くが、円心は老令の為であろうか、戦場には子息の則祐や貞範・範資の名が多くみられる。

晩年に至った円心は、名僧雪村友梅に帰依して白旗城西方の苦縄に法雲寺を建て、また播州清水寺造営に意を用い、建仁寺に大竜庵を興して己が塔所とするなど、破乱の生涯にふさわしい幕引きを心がけているようである。

貞和元年（一二四五）円心六十七才。赤松氏総領

家を引退。

観応元年（一二五〇）一月十七日、円心京都七条

邸に歿する。寿七十三才。

法雲寺殿月潭円心。

建武中興の主人公後醍醐天皇はこれより十一年前の延元四年南山にて薨去。それに対する足利尊氏はこれより八年後の延文三年に歿する。南北朝の動乱に生き抜いた円心公の生涯ははたして如何なる評価を受けるのだろうか。

末裔登場

赤松氏の部



① 有馬頼底（五七才）

② 京都市上京区烏丸通上立売東入
大本山相国寺塔頭「光明寺」

○七五—五七—〇四五四

③ 播州・攝津（赤松流有馬氏）

④ 村上天皇—具平親王—師房—季房—季則—頼則〔播磨守〕……

：赤松円心則村・則祐有馬出羽守義祐：有馬則頼—豊氏福知山六万石より元和六年久留米二万石へ

—忠頼……賴威—賴多—正頼—賴底

⑤ 京都に住んで三十五年、京都の景観が破壊されて行くことに危

機感を深めており、京都の歴史景観を守るために立ち上っています。何卒御支援下さい。平成二年臘月

⑥ 有馬巴 竜瞻車

※本文の「久留米藩主 有馬伯爵家の栄光」をご参照ください。

編集部



① 赤松悌介（六三才）
号円豊

② 東京都港区六本木七一七一
赤松国際法律事務所

○三一三四〇五一〇〇八六

③ 岡山県倉敷市玉島阿賀崎

④ 赤松則村—則祐—則輝（則祐五世の孫）—十三朴（則輝十六世

の孫）—氣長—潤吉—悌介

（上郡の金華山法雲寺獲持会代表として、赤松一族の顕彰と追善に率先ご活躍していられます。）

編集部

○ご寄稿文章の長短や紙面数の都合から、予告しましたような掲載スペースがとれませんでしたことをお詫びいたします。
○掲載文はなるべく原稿に忠実となるよう心がけましたが、ときに改めさせていただきました。あしからずお許しひがいます。

○①氏名 ②現住所 ③本貫 ④家系 ⑤所感・メッセージ ⑥家紋

以降、会員紹介のページに付き、中略

赤松氏関係名簿

三の教子
研究ノート
配本数
○保育園 教材

赤松氏の末裔ご一統はおそらく万を越す大氏族であろうと思われますが、現在事務局でわかつておりますお方だけをここに掲出しました。

この名簿をふみ台にして、大赤松氏一族名簿ができるることを切望します。

なお、お名前の読み方が適当でないお方もあるうかと、次回何かのご連絡の折に、正してください。

清

(赤松氏関係寺社)

12/10

宝林寺 (平六七九一四)

兵庫県竜野市揖保町門前

恩徳寺 (平六七九一四)

兵庫県竜野市揖西町中垣内

斑鳩寺 (平六七三一四)

兵庫県揖保郡太子町鶴

清水寺 (平六七九一五)

兵庫県加東郡社町平木

宝樹寺 (平七〇八一〇)

兵庫県苦田町奥津

法雲寺 (平六七八一二)

兵庫県赤穂郡上郡町河野原

法雲寺 (平六七八一二)

兵庫県赤穂郡上郡町河野原

宝林寺 (平六六九五一)

兵庫県朝来郡和山町竹田

宝林寺 (平六六九五一)

兵庫県赤穂郡上郡町河野原

以降、会員紹介のページに付き、中略

あとがき

- ◎ 昨年五月、竹田城址にできた両軍陣歿者供養塔が登閣者の注目を浴びています。数百年前の攻防が平成の今日まで忘れ去られずに守り伝えられていることを知り、今さらのように歴史の重みを感じたとのお声をいただいて、やはり良かつたんだなあと喜んでおります。
- ◎ 今号は赤松氏を中心とした編集になりました。末裔登場や名簿欄に山名氏関係も収載のはずでしたが、兩氏同時では何かスッキリしないようとして、また紙数の都合もあって、山名氏の皆さんは次号にゆることとさせていただきました。お申込くださいました各位には申訳なく存じますが、どうか次号までお待ちいただくようお願い申します。
- ◎ 昨秋九月、山名宗全公の御葬所を、宮田先生の「案内で、京洛西梅津長福寺に訪ねました。文明五年この地で火葬にされた跡地には五輪の茶毘塔が、ひつそりと青苔に埋もれて鎮まり給うておりました。南禪寺真乗院のお墓は世に知られていますが、この方はどなたもご存知ないようで……とは梅津老師のお言葉でした。（二十一頁参照）
- ◎ 一月某日、こんどは赤松円心公のお墓を訪ねて東山の建仁寺へまいりました。観応元年七条邸で逝去された公は、山内の大竜庵に葬られますが、古型のドッシリした宝篋印塔は現在、塔頭久昌院墓地に移遷奉安されております。ここでも、播州法雲寺の御廟所は有名ですが、こちらはあまり知られておりませんので……と野田老師が淋しそうに述懐されました。申訳ないことです。（口絵写真参照）
- ◎ 温故知新。この小冊子を踏み台にしてどうぞご研究の程を。

山名氏研究ノート 第2号

平成三年四月二十日発行

編集・発行

山名氏顕彰会
赤松両氏顕彰会

兵庫県美方郡村岡町山名寺内

(事務局 吉川 広昭)

印刷

(株)谷本紙業

兵庫県城崎郡日高町江原

